

令和6年度 公立鳥取環境大学
学校推薦型選抜（I型）問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は2枚です。
3. 解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、問いに答えなさい。なお、解答の際、句読点、「」、() も1字と数えます。

世界を変えるのは「エラーする力」

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「新生ニューロン」という神経組織を生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競っているという。

たしかに、何をやるにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという点、現実にはそうになっていない。実は新発見というものは、発見者が一五～一六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨髄化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位」が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は -1 の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三〇年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気が形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。

距離を置いて全体を見よう

何かを学んでいこうとするとき、「好き」という感覚ほど強い味方はない。一方、「嫌い」という感覚は、学びにブレーキをかける。好きなことはいくらでもできるが、嫌いなことはやりたくない、と。加えて、好きや嫌いという感覚は個人的な感覚だから、誰かに「私はリンゴが好きだ」と言ったとしても、「それは君が好きで、僕はバナナが好きだ」と返される場合が少なくない。好き嫌いは何かをブロックしてひとりよがりな世界を生み出すことがあるのである。

しかし、内面でわき起こる好きや嫌いは、大切にしなければならない。それが人生をつかっていくのだから。だが何かを本当に学ぶためには、好き嫌いの感覚を、さしあたり停止して、どうして好きなのか、どうして嫌いなのかを正視しなければならない。矛盾していると思うだろう。しかし、数学の勉強が嫌いなら、どこが好きでどこが嫌いなのかを考えてほしい。考えることが、単なる好きや嫌いの感覚から距離を置くことを教えてくれるから。それが学ぶことの第一歩。今のうちにその術を身につけてほしい。好きだから、嫌いだからで終わってはいけない。

学ぶためのもう一つのポイントは、全体を見ること。それと同時にどこか一点を見なければならない。全体だけを見ていても絶対に自分のものにはならない。これも矛盾していると思うだろう。だがスポーツを想像すればわかりやすい。スポーツは単に肉体の問題ではない。例えば野球では、筋力を鍛えさえすればホームランを打てるわけではない。筋力だけでなく、身体全体を考え、何かポイントをつかむことでバッターとして成長できる。人はそれぞれ「癖」を持っているものだが、それを捨て、自分なりのポイントをつかむことが基本だ。

これは思考の基本でもある。人間がものを考えるとき、公理から出発することはありえない。全体のコンテクストをぼんやりと視野に入れながら、その中で手がかりを見つけて考えを進める。 $A=B$ 、 $B=C$ 、 $C=A$ といったような論理は、考え抜いたあとで、他者に説明するために組み立てる表現だ。事件現場に立つシャーロック・ホームズを想像してほしい。彼は、現場全体を見ながら、頭の中ではそれまでに集めた証拠品のイメージや証言を繰り返していることだろう。全体を見ながら、どこかに特異点を見いだそうとしているのである。さまざまな要素があり、それらがどういう関係にあるのか、そしてそれらの関係がどう全体をかたちづくっているのかを見ていくのである。

こうした思考は、数学でも国語でも、研究でもビジネスの現場でも変わらない。「文科系と理科系ではアタマの使い方が異なる」などと思いついてはならない。原則は同じなのだ。文章全体を見ていながら、どこかに必ず文章全体にかかわるひっかけがあるはずだ。それをつかむ。そのポイントを自分なりに展開することで人間はものを考え始めることができる。学校の勉強には正解が用意されている。皆さんが誤った答案を書けば、間違いを指摘される。だが皆さんに課されているのは、正解を知ることではなく、頭の働かせ方を学ぶことだ。この学びは、たんに知識を蓄えることではなく、自分自身を変えていくことにほかなら

ない。全体のコンテクストがあり、その特異点をつかんで全体をもう一回つくり直す。これは自分の世界を自分でつくり直していく力でもある。

～中略～

人間であるから学び、人間であるために学ぶ

今の皆さんだけが感じることができる、世界の中で生きていることに対する違和感。そして、世界と自分の間に感じられる越えがたいズレ。その中にすべての「種」が詰まっている。世界に対して脳を開き、「あれは一体何なのか？」「これはおもしろい！」「どうしてこれに興味を引かれるのだろうか？」といった、自分にしかわからない小さな違和感や疑問を大切にしておいてほしい。それが皆さんの大きな役目だ。学校の勉強は、無味乾燥に感じるかもしれない。しかしその中にも「種」はあり、将来、花開く仕掛けが数多く詰まっている。考え抜き、心の中に「種」を宿しておくことが今はとても大切だ。

私は今、主に現代哲学を勉強している。だが大学にはもともと物理学を志して入学した。いくつかの理由で文科系に移籍、フランス語を学んだ。しかし卒業論文のテーマには絵画を選んだ。ということを見ると、中学二年生のとき、国立美術館のピカソ展で生まれて初めてピカソの絵を見たときの強い印象やそのとき抱いたアートへのあこがれ、そして同展について学校新聞に文章を書いたことなどがずっと心に残っていて、あるとき甦ってきたのだなあ、と感じる。学ぶ意志さえあれば、どのような「種」も花開いてくる。学びとは一時の行いではなく、人生を変える一生の問題なのだ。

学ぶということから、人間は逃れられない。人間のニューロンは、歳をとっても少しずつ新生し続けるという。どうやら我々は生物学的にも学び続けることを運命づけられているようだが、人間は、自己の非自然的なあり方に由来する「自由」のもとに学ぶからこそ「人間」なのだ。言い換えれば、学ぶことは、自分が人間として今ここで生き、存在しているということと分かちがたく結びついている。しかしその学びは、決して完成しない。ひとたび完成したならば、次なる完成に向けて自分自身をつくり替えながら学んでいかなくてはならないから。その意味で人間とは、「途上の存在」にほかならず、常に道半ばなのである。学ぶことは、自分をつくり替えることであり、世界をつくり替えること。今このことを感覚できれば、それが一生の力になるだろう。

(出典：小林康夫[2015]「学ぶことの根拠」 桐光学園＋ちくまプリマー新書編集部・編『何のために「学ぶ」のか』筑摩書房、162～173頁 一部改変)

問1. 本文を300字以上400字以内で要約しなさい。

問2. 本文または問1の解答中の表現から重要と考えられるものを3つ選び、それぞれ「」内に正確に引用するとともに、それぞれの直後にそれぞれに対するあなたの考えを、根拠や理由もわかるように述べなさい。